

千葉市感染症発生動向調査情報

2013年 第37週 (9/9-9/15) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数		37週	36週	35週	34週
上段:患者数 下段:定点当たりの患者数 「定点当たりの患者数」とは 報告患者数/報告定点数。	小児科	17	17	17	18
	眼科	4	5	5	5
	インフルエンザ*	27	27	27	28
	基幹定点	1	1	1	1

定点	感染症名	千葉市				千葉県	
		注意報	9/9-9/15	9/2-9/8	8/26-9/1	8/19-8/25	9/2-9/8
			37週	36週	35週	34週	36週
小児科	RSウイルス感染症	○	5 0.29	3 0.18	5 0.29	4 0.22	64 0.48
	咽頭結膜熱		2 0.12	2 0.12	5 0.29	5 0.28	53 0.40
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		15 0.88	24 1.41	20 1.18	15 0.83	147 1.10
	感染性胃腸炎		56 3.29	48 2.82	31 1.82	44 2.44	339 2.53
	水痘		4 0.24	5 0.29	7 0.41	3 0.17	43 0.32
	手足口病	★○	81 4.76	71 4.18	70 4.12	108 6.00	485 3.62
	伝染性紅斑		0 0.00	1 0.06	0 0.00	1 0.06	8 0.06
	突発性発しん		18 1.06	11 0.65	12 0.71	15 0.83	68 0.51
	百日咳		0 0.00	1 0.06	0 0.00	0 0.00	2 0.01
	ヘルパンギーナ		19 1.12	11 0.65	17 1.00	22 1.22	79 0.59
	流行性耳下腺炎		3 0.18	1 0.06	0 0.00	1 0.06	26 0.19
インフル	インフルエンザ*(高病原性鳥インフルエンザを除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
眼科	急性出血性結膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	流行性角結膜炎	○	4 1.00	3 0.60	9 1.80	3 0.60	17 0.52
基幹定点	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	1 1.00	0 0.00
	無菌性髄膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	マイコプラズマ肺炎		0 0.00	0 0.00	2 2.00	1 1.00	0 0.00
	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0 0.00	4 4.00	2 2.00	1 1.00	0 0.00

★★:流行中 ★:やや流行中 ○:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患(7件)

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	80歳代	病原体の検出等	結核	女性	80歳代	病原体等の検出
結核	女性	40歳代	IGRA検査	結核	女性	80歳代	病原体遺伝子の検出
結核	女性	60歳代	IGRA検査	風しん	女性	30歳代	病原体遺伝子の検出
結核	女性	70歳代	IGRA検査等	-	-	-	-

・結核6件(192)、風しん1件(216)の報告があった。

()内は2013年累積件数 ※ 累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第37週のコメント

<RSウイルス感染症>先週より増加し0.29となった。過去9年の同時期と比べて多め。

<手足口病>先週より増加し4.76となり、依然として流行発生警報継続基準値(2.00/定点)は上回っている。過去10年の同時期と比べると最多。

<流行性角結膜炎>先週より増加し1.00となった。過去10年の同時期と比べると2012年と並んで最多。

トピック

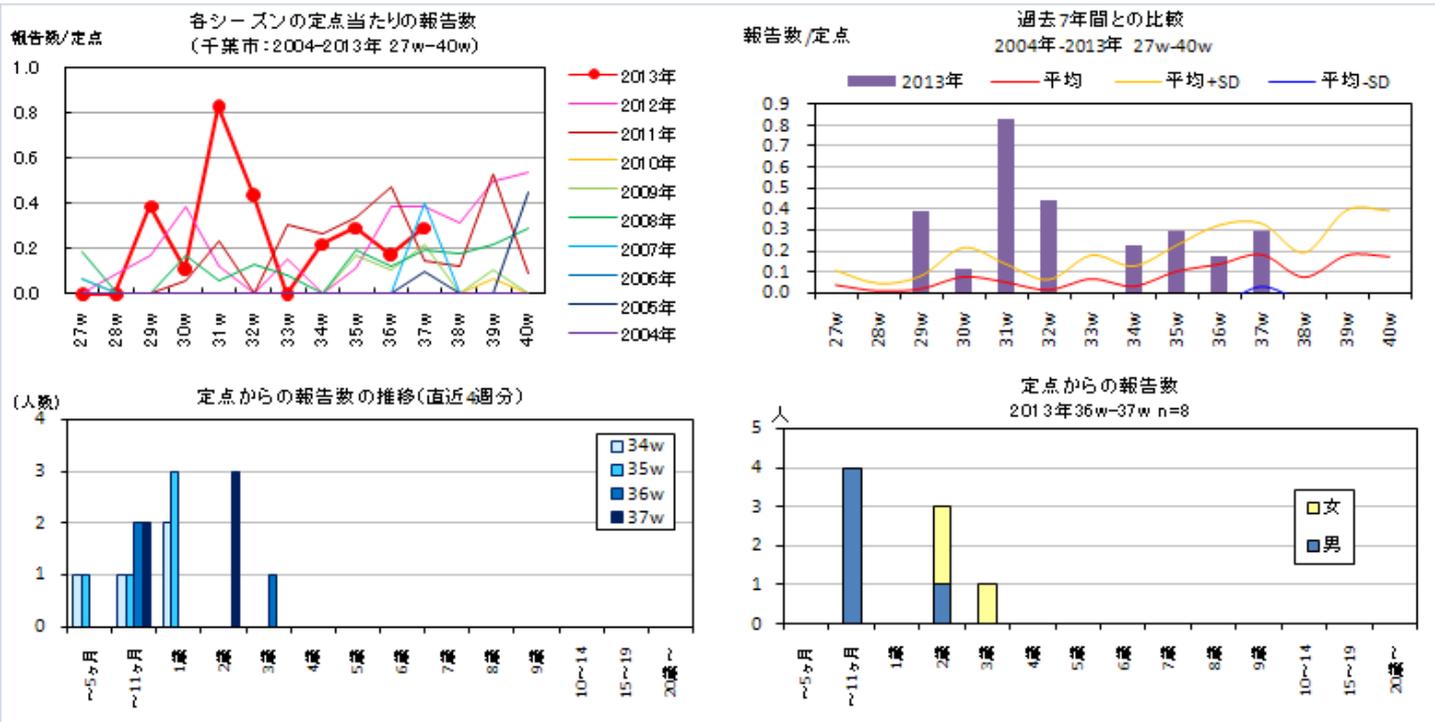
<RSウイルス感染症>

2013年の全国レベルは、第35週から急激に増加しており、第36週現在は過去6年の同時期と比べて2012年に次いで多くなっています。都道府県別では、佐賀県、宮崎県、福岡県の順に多く報告されています。千葉県は全国レベルと比べると少なくなっています。千葉市は第29週から例年に比べて高い水準で推移しており、第37週現在は前週より増加し0.29となり、過去9年の同時期と比べて多めとなっています。区別の発生状況では、中央区で最多で、同区の6か月～11か月齢及び2歳で多く発生しています。

本疾患は、乳幼児において悪化しやすい感染症です。RSウイルスの感染力は非常に強く、多くの子どもが罹患します。感染経路としては呼吸器飛沫や、呼吸器からの分泌物に汚染された手指や物品を介した感染が主なものであり、特に濃厚接触により感染します。

年齢を問わず生涯にわたり繰り返し罹患し、2歳以上から年齢を追うごとに重症度は減りますが、高齢者において時に重症の細気管支炎や肺炎を起こし、施設内での集団発生が問題となっています。特に1歳以下では、最初の感染で中耳炎の合併がよくみられます。また、乳幼児が罹ると細気管支炎や肺炎を起こしやすく、生後4週未満では感染の頻度は低いですが、突然死に繋がる無呼吸が起きやすいとの報告もあることから注意が必要です。流行は通常急激な立ち上がりを見せ、2～5カ月間持続するとされています。通常では毎年11～1月にかけて特に都市部での流行がみられます。

予防は、症状がある方は乳幼児から離れることや、厳重な手洗いなどです。また、ワクチンは研究段階であり、現在利用可能な予防方法としては、モノクローナル抗体製剤であるパリビズマブ(Palivizumab)の筋注による予防効果が期待できるとされています。

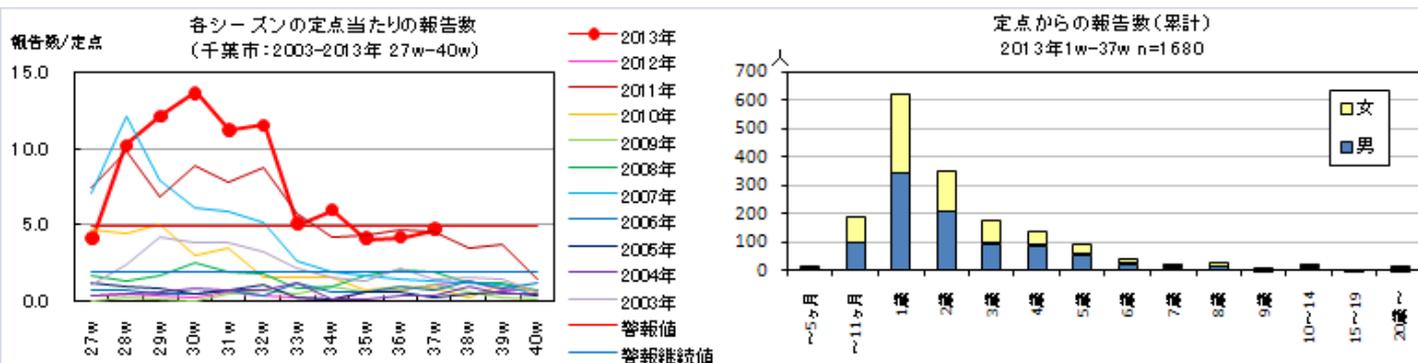


<手足口病>

2013年の全国レベルの第36週現在は前週よりやや減少しましたが、依然として流行発生警報継続基準値(2.0/定点)は上回ったままです。過去6年間の同時期と比較すると2011年に次いで多くなっています。都道府県別では、新潟県、北海道、長野県の順に多く報告されています。千葉県は全国レベルと比べると少なくなっています。千葉市は第36週から連続して増加しており、第37週は4.76となり依然として流行発生警報継続基準値を上回っています。過去10年間の同時期と比べると最多で、平均+2SDを上回り非常に多くなっています。区別の発生状況では、花見川区と若葉区で増加に転じ、中央区、稲毛区で減少しました。若葉区、稲毛区、花見川区で流行発生警報開始基準値(5.0/定点)を上回っており、中央区で流行発生警報継続基準値を上回っています。若葉区が最多で、同区の1歳児で最も多く発生しています。

手足口病は、口腔粘膜および四肢末端に現われる水疱性の発疹を主症状とし、幼児を中心に流行する急性ウイルス性感染症です。主な原因ウイルスはコクサッキーA16(CA16)、あるいはエンテロウイルス71(EV71)です。感染経路は経口・飛沫・接触などで、潜伏期は3～4日が多く、主な症状が消失した後も3～4週間は糞便中にウイルスが排泄されます。まれに髄膜炎や脳炎などの合併があり、経過中の頭痛と嘔吐には注意が必要です。

流行していることから、感染防止に努めましょう。ワクチンなどの積極的な予防方法は現在のところありませんが、経口・飛沫・接触感染を防ぐため、排泄物の取り扱いに注意し、手洗いうがいなどを励行しましょう。



<流行性角結膜炎>

2013年の全国レベルの第36週現在は、過去6年間の同時期と比べてほぼ例年並みとなっています。都道府県別では、沖縄県、宮崎県、愛媛県の順で多く報告されています。千葉県は全国レベルと比べて少なめとなっています。千葉市では第34週から例年に比べて高い水準で推移しており、第37週は前週より増加し1.00となり過去10年間の同時期と比べて2012年と並んで最多となりました。区別では美浜区で最も多く、同区の20歳代で発生しています。

流行性角結膜炎は、主にD群のアデノウイルスによる疾患で、職場や家庭などで、ウイルスにより汚染されたティッシュペーパー、タオル、洗面器などに触れるなどして感染します。季節としては8月を中心として夏に多く、年齢では1～5歳を中心とする小児に多いですが、成人も含み幅広い年齢層にみられます。

潜伏期は8～14日で、急に発症し、眼瞼の浮腫、流涙を伴います。感染力が強いので両側が感染しやすいですが、初発眼の方が症状が強くみられ、耳前リンパ節の腫脹を伴います。

有効な薬剤はなく、予防の基本は接触感染予防の徹底です。眼疾患患者の分泌物の取扱いと処分に注意し、手洗い、消毒をきちんと行いましょう。

